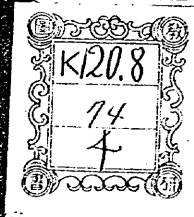


新撰
尋常小學讀本

卷四

檢定申請本



K120.8

74

4

育英舎編纂

新撰尋常小學讀本卷四

新撰尋常小學讀本卷四

目次

第一課 われらの國

第二課

第三課

第四課

第五課

第六課

第七課

第八課



天長節

汽車

鳥のちゑ

一 二 四 五 七 八 九 十一

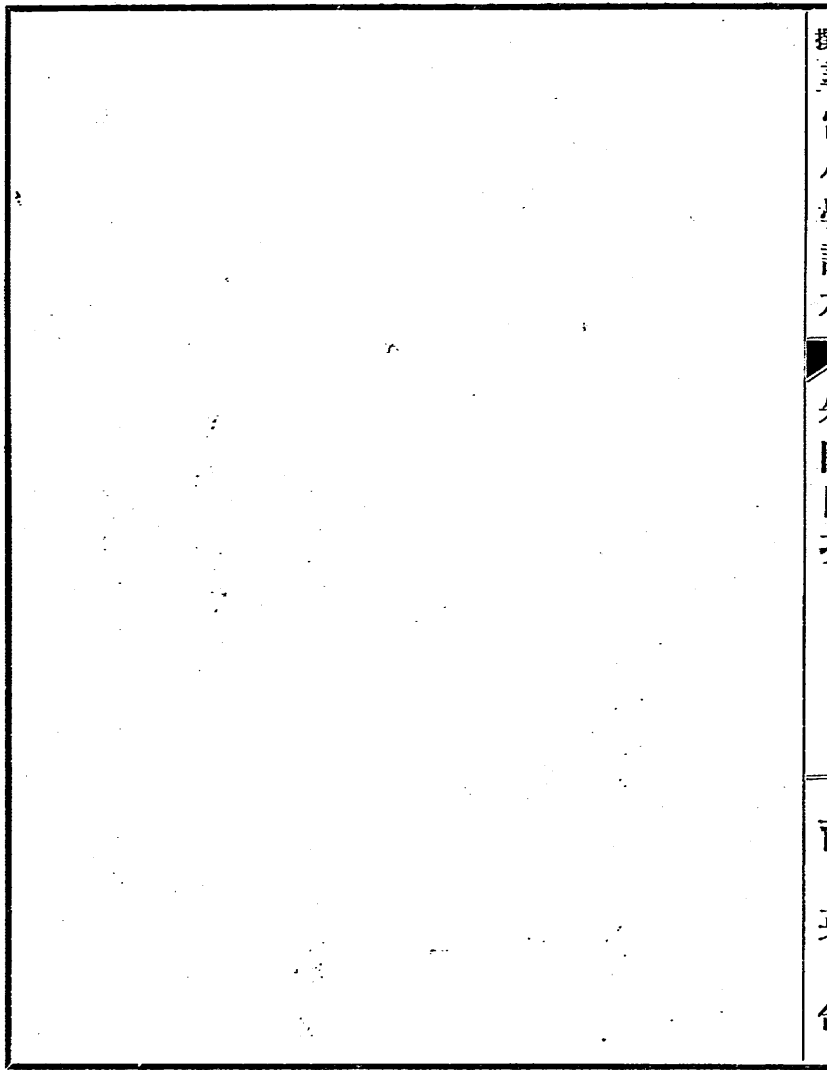


新撰尋常小學讀本 卷四目次

育英舎

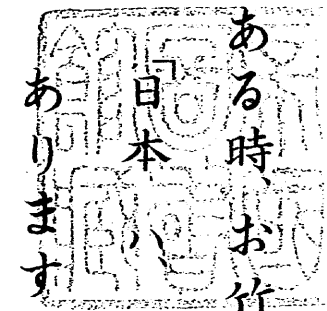
第九課	カウモリノ二心	十三
第十課	リヨジュンロノ戦	十四
第十一課	鼠のさうざん	十六
第十二課	獅子	十八
第十三課	日吉丸	十九
第十四課	さうぢ	二十二
第十五課	一月一日のうた	二十三
第十六課	七曜	二十四
第十七課	チガハタイザン	二十五
第十八課	雪ガツセン	二十六

第十九課	たのしき家	二十八
第二十課	紀元節	三十
第二十一課	忠二の手紙	三十一
第二十二課	三郎の鳩(一)	三十二
第二十三課	三郎の鳩(二)	三十四
第二十四課	雀ノ話	三十五
第二十五課	竹むら	三十七



新撰尋常小學讀本卷四

第一課 われらの國

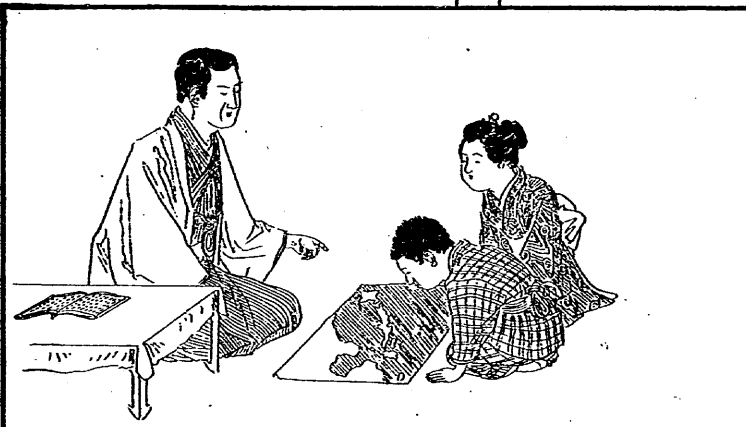


ある時、お竹と、忠二とハ、父に向ひ
日本ハ、どれほど、大きい國で
ありますか、と、たづねたり。

父ハ、一まいの圖をとり出し、二人
に、おめりて、云ふやう、われらの

國 忠二 日本 圖

か



住める、大日本國ハ、
 このとほり、あまたの
 島々が、ほそかかく
 つづいてゐる島國
 であつて、さほど、大
 きい國でハ、かい。
 されど、わが國ハ、き

こうがよく、とちがこえて、こく
 もつ、やさしい、そのほかの、さんぶつ
 が、たくさん出る。

天皇

ことに、上よハ、たふとい 天皇ま

人民

しまし、下よハ、ちうぎの人民あ

外國

りて、まことに、よい國あれば、
 外國の人もうらやんで居る。

人民が、ちゆうぎであい國ハいか
 ほど大きくとも、よわいもので
 ある。と、云ひきかせたり。
 二人ハ、耳をすまゝて、このものが
 たりをき、居たり。

四季

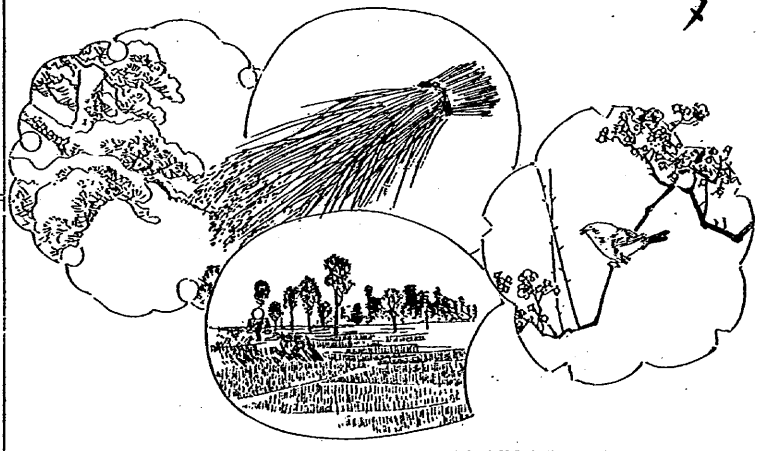
第二課 四季

年

一年ノウチニテ、二月ノハジメ

夏

ヨリ、五月ノハジメ
 マデヲ春トイフ。
 花サキ、鳥ウタフ
 コロナリ。
 春スギテヨリ、八月
 ノハジメマデヲ、
 夏トイフ。



草ノビ、木シゲルコロナリ。

夏スギテヨリ十一月ノハジメ

マデヲ秋トイフ。

木ノハ色ヅキ、コクモツミノル

コロナリ。

秋スギテヨリ、アクル年ノ、二月ノ

ハジメマデヲ冬トイフ、雪フ

秋

冬
雪

リ、水コホルコロナリ。

コノ春夏秋冬ヲ、四季トイヒ、マイ

年、メグリくテ、タガフコトナシ。

第三課 あり

ありハ、つちのふか、まよハ、くち

きに、すをつくり、たぐさんあ

つまりて、なかよくすまひ、はる、

あ

く

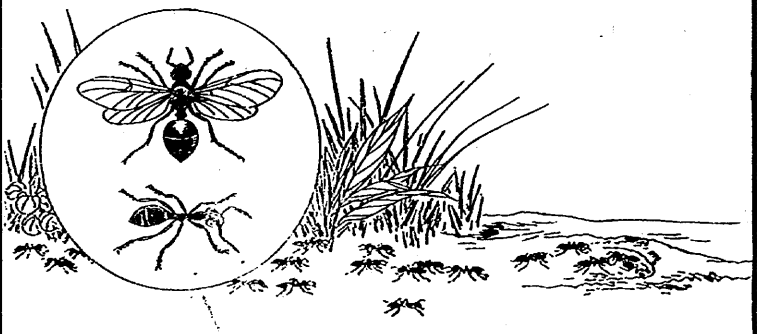
あつ、あきのあひだ、はたらきて、
ふゆハ、すのなかよやすみをる
ものなり。

ありよハ、はねあるものと、はね
なきものとありて、はねあるも
のハ、すのなかにて、たまごを
うみ、はねなきものハ、すを

三

くり、こどもをそだて、
また、くひものをはこ
ぶなど、つねにゆそ
がしくはたらくもの
なり。

ありハ、つねに、あぶら
むしをかほゆがり、



そ

そのをらより、いづるゝるをす
ふなり。これ、ひとが、めうゝの
ち、を、まぼりて、のむよにたり。

毛利
元就

第四課 毛利元就

高

昔、毛利元就 ト云ヘル名高キ大
シヤウアリタリ。元就、病ニカ、
リテダンクオモクナリシ時、

枕

三人ノ子ヲ、枕ノモトニ呼ビ

矢

ヨセ、兄弟ノカズホド、矢ヲト

折

リ出シ、一タバトナシテ、之ヲ
折ラシメシニ、イヅレモ、折ル

コトアタハズ、サラニ、一本ヅツ

折ラシメシニ、タヤスク折レタリ。

伸

ソノ時、元就ハ、兄弟、伸ヨケレバ

タバ子タル矢ノ如ク其ノカツ
 ヨクナリテ家サカエ仲アシケ
 レバ一本ツツ
 ノ矢ノ如ク
 其ノカヨワク
 ナリテツヒニ
 ハ家ホロブル



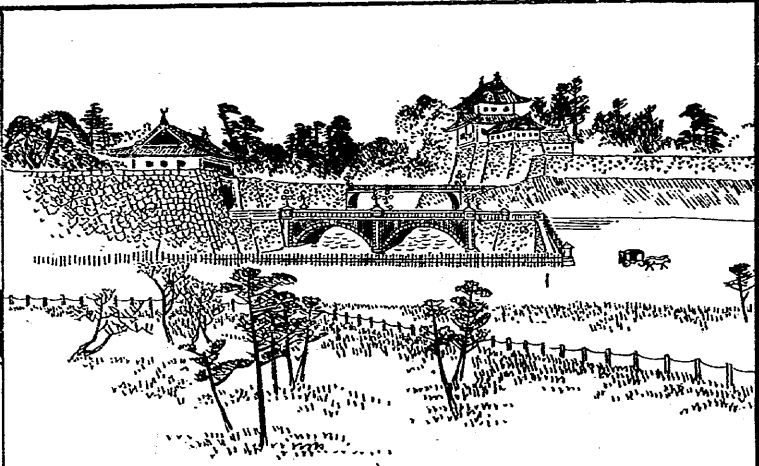
皆守

ミイタルモノゾトイマシメタリ。
 三人ハ皆ヨク父ノイマシメヲ守
 リテ仲ヨクシタレバ毛利ノ家
 ハマス〜サカエタリ。

第五課 宮城

宮城
 陛下
 東京

宮城ハ天皇陛下ノオイデアソバ
 ストコロニテ東京ノマンナカニ



新早宮ノ御門

米田

ハ

新早宮

ガキノ上ニハ、年
 フリタル松、アヲ
 アヲトオヒシゲリ、
 イト、ケダカク見
 アゲタテマツラル。
 ニチウ橋ノ外ハ、
 ヒロビロトシタル

橋 御門



撰

米田

新早宮

アリ。
 宮城ノマハリハ、
 フカキオホリニテ
 セウメンノ御門ノ
 前ニハ、ニチウ橋
 タカクカ、リ、ソノ
 左右ノ高キ石

其

シバフニテ、其ノ外ハ、又、高キ石ガキ、ヒロキオホリニテ、トリマキ、オモクシキオンカマヘナリ。

天長節

第六課 天長節

今日ハ、天長節とて、

今上天皇陛下の、おうまれあるばされたる、めでたき日なり。

臣民

されバわが日本國の臣民ハ、まごころをつくりて、天長節をいはひたてまつるべきなり。

よ

けふのよき日は、たほぎみの、うまれたまひし、よき日なり。今日のよき日ハ、みひゐりの、さしでたまひし、よき日あり。

の

君代

ひかりあまねき、君の代を、
 いはへもろびと、もろとも
 に。
 めぐみあまねき、君の代を、
 いはへもろびと、もろとも
 に。

(祝祭唱歌)

汽車

第七課 汽車

孝一

ある日、孝一、忠二の兄弟は共に、よそ
 に行き、途中まで、汽車のふみきり

途中

笛

大



をとほりたり。
 折しも、はるかむかう
 の方にて、笛のね
 一こゑ、高くきか
 えりかば、二人ハ
 立ちどまりて、
 ちがめ居たるに、

走

汽車ハ、くろきけむりをあげ、
ゴーク、と、音、いて、いきほひす
るどく、走り來れり。

吹帽子

其の時ふみきりのそばに、一人の
子供、立ち居たり、が、汽車の來
るはづみに、帽子を吹きとばさ
れたり。

近

孝一ハ、このさまを見て、忠二よ
向ひ、「汽車のみちには、近よらぬ
やう、つねづね、きをつけねばなり
ませぬぞ」と、云ひきかせたり。

第八課 鳥のちゑ

あるあつき日、あまたの鳥、つれだ
ちて、たびをふり、に、途中まで

2

のど、かじきたれども、あさりよ水
あぐりて、大いに、こまりはてたり。
かゝるところに、一羽の鳥、水のはい
れる、かめを見つけーかバ一同ハ
いそぎ、そこにあつまりたり。

深

あかるに、かめ深くーて、くちむし、
水にとどかず、みあぐ、かほを

合

見合せ居たり。

老

時に、一羽の年老いたる鳥ハ、

考

あばー考へ居たりーが、やがて、
さーづよてもあすやうに、こゑ
たかく、カーくど、なきけれバ
一同ハうちうあづき、小石を、
かめの中よはこび入れーに、

水面
次第

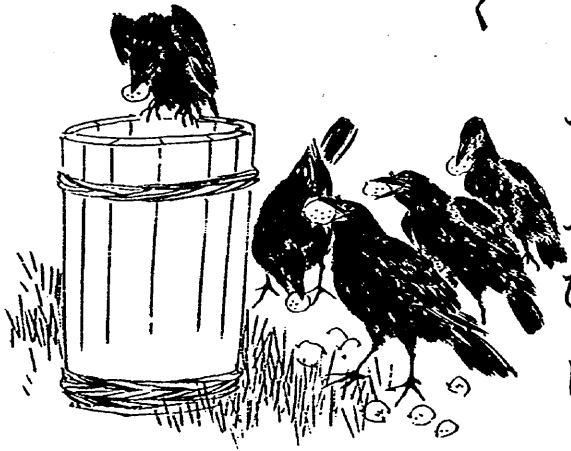
撰選集八巻目

巻四

蕭葉集

舌

水面次第にあがりてつひに
 くちばりのとどくに
 いたりかば、
 みおく舌うち
 おらし思ひの
 まゝに水をのみ
 て、又たびをつづけたりとぞ。



或
鼠
互

第九課 カウモリノ二心

或時、小鳥ト、鼠トガ互ニ、ドウゼ
 イヲアツメテ、カツセンヲハジ
 メタリ。コノカツセンヲ見テ
 居タルカウモリハ、何レヘカ、ミカ
 タセント思ヒ、シバシ、ハタイロ
 ヲナガメ居タリ。

新編和歌集

巻四

十三

蕭葉集

我

似

其ノウチニ、小鳥ノ方、ツヨサウ
 ニ見エケレバ、カウモリハ、「我レ
 ハ、羽アリテ、小鳥ニ似タレバ
 トテ、小鳥ノミカタニナリタル
 ガ、ヤヤアリテ、鼠ノ方ニ、カチ
 イロ見エタレバ、カウモリハ、又
 イフヤウ、我レハ、モト、鼠ニ似

戦



タレバ、「トテ、イツノ
 マニカ、鼠ノ、ミカタ
 トナリタリ。
 カクテ、ハゲシク戦ヒ
 タルノチ、兩軍タガ
 ヒニ、ツカレタレバ、
 ツヒニ、仲ナホリシテ、

ワカレタリ。

コレヨリ、小鳥モ、鼠モ、カウモリノ
行ヒヲニクミテ、ナカマニ入レ
ザリキトゾ。

第十課 リヨジユシロノ戦

支那

我が國ト、支那ト人、センソウノ時、
我が軍人、リヨジユシロヲ攻メシハ、

明治

明治二十七年、十一月二十一日ナリキ。
リヨジユシロニハ、多クノハウダイ
アリ、アマタノ兵士、守リ居テ、其
ノカマヘ、ナカクケンゴナリ。

我が軍ハ、此ノ日ノヨアケ方ヨリ、
ハゲシク、攻メカケタレバ、敵兵ハ、
チライクワヲハツシ、大ハウヲ

勇

所々

ハナチ、ヒツシト
ナリテフセギタリ。
サレド、勇ミニ勇
ミシ我ガ軍ハ、フ
リクルタマヲ物ト
モセズ、所々ノハウ
ダイヲノツトリ、



大勝利

強

次第々々ニオシヨセタレバ、サシモ
ケンゴノリヨジユンロモ、其ノ日ノ
タ方マデニハ、コトゴトクヤブレテ
我ガ軍ノ大勝利トナリタリ。
サレバ、外國人モ、我ガ軍ノ強キニ
ハ、舌ヲマイテ、オドロキタリト
イフ。

第十一課 鼠のさうだん

天井

或る家の天井に、多くの鼠あつ

猫工夫

まりて、猫よとられぬ工夫を

あきんとて、色々、さうだんをふ

ゝ居たり。

若

時に、一匹の年若き鼠を、み

出で、「となりの子猫のやうに、

鈴

ほかの猫よも、くびに、鈴をつ

けてやつたら、

近よる音が知

れて、すぐよげ

られませう」と、

ほこりがほして

云ひたり。



多くの鼠ども、「よいお考がつき
まゝした」と云ひて、ほめはやせり。

誰

其の時年老いたる鼠ハ、誰れが

ハ

鈴をつけよ行きまほかと、云ひ

けれバ、皆々、「あるほど」とて、だま

つて、ままひ、さうだんハ、やめ

にありたり。

事

何事をなすよも、あとさきを考へ

ねバあらぬものなり。

獅子

第十二課 獅子

獅子ハ、大イナルケモノニシテ、

爪

ノコギリノ如キ、ハ、ト、スルドキ爪

牡

トアリ、コトニ、牡獅子ニハ、ウツ

クシキ、タテガミアリテ、マコトニ、

夜分

オソロシク見ユ。

獅子ハ、夜分、谷川ニ

チカキ、ヤブノ中

ニ、カクレ居テ、

ホカノ獸ガ、水ヲ

ノミニ來ルヲ

ウカガヒ、猫ノ



獸

牛馬

鼠ヲトラフル如ク、フイニ、トビツキテ、トラフルナリ。

獅子ハ、カキハメテツヨク、トラヘ

タル獸ハ、牛馬ノ如ク、大イナル

モノニテモ、タヤスクホラアナ

マデ、クハヘ行キテ食フナリ。

獅子ノホユルコエハ、カミナリノ

食

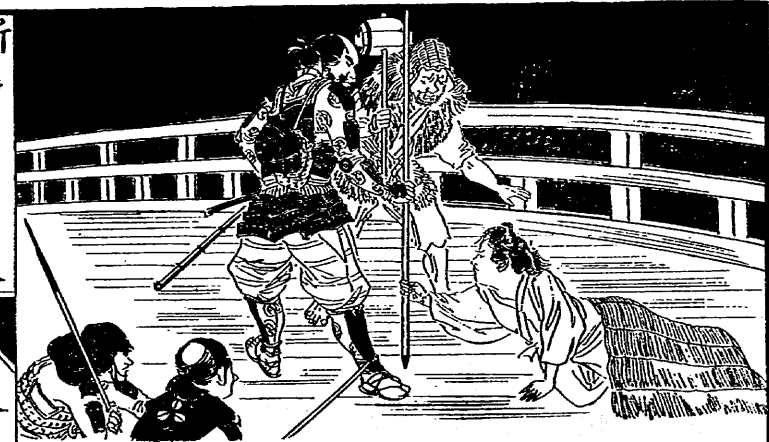
王

幼 秀吉

如クヒビキワタリテ、イト、スサ
 マジケレバ、ソノコエヲキク時
 ハ、イカナル獣モスクミテ、アユ
 ミ得又トゾサレバ、獅子ヲ獸
 ノ王トハ云フナリ。

第十三課 日吉丸

日吉丸とハ、太かふ秀吉の幼き時



の名なり。
 日吉丸ハ、よき主人
 をもとめて、ほうこ
 うせんと思ひ立ち、
 十六の春ひとり
 家を出でて、あち
 こちと、さまよひ

宿 錢

あるきたり。

或夜、日吉丸ハ、錢あくりして、宿を

とることできず、橋の上まで、

大の字なりに、ねて居たり。

かくて、夜のふけしころ、日吉丸ハ、

あたまに、はたとさいるもの、あ

りし、かば、な^カにやつなるかと、えね

通

木きて、あたりを見れば、二三十
人のたうぞく共、てんでに、やり、
なぎなたなどを、ひつさげて、通り
行けり。

無禮

日吉丸ハ、こゑあららげて、「無禮も
のめ、我があさまをけたるから
よハ、其のまゝ、通しハせぬぞと、

持

云ひながら、其の中のかしらと
たぼりきものの、持ちたるやり
のえを、一つかたわさへて、ひき
とめたり。

たうぞく共ハ、日吉丸のゐせいに、
たそれ、ていねいに、わびを云ひ
て、過ぎ行きたりとぞ。

過

内 庭



第十四課 さうぢ

孝一と、忠二とハ、
外に出でて庭
をはき、お竹ハ、内
のいたのまを
ふき居れり。

この兄弟ハ、毎日、

故

少

古

美

新

よくさうちをあす故、いたのま、
はーらなどハ、いつもきれいな
て、庭よハ少ーのちりもなし。
古き家にてハ、よく、さうちをきれ
バ、美しくなりて、住むよも、こ
ころよく新らーき家よても、
さうちをたこたれバ、見ぐるーく

と

残

なりて、こ、ちわろし。
又、さうちハ、うんどうとなりて、
からだのためよもときものなり。

第十五課 一月一日のうた

第一

年のはトめの、ためーとて、
をはりあき世の、めでたさ残、

て
松竹たてて、かどごとに、
いはふけふこそ、たのしけれ、

第二

御代
はつ日の光り、あきらけく、
おさまる御代の、けきのそら、
君がまかげに、たぐへつ、
あふぎ見るこそ、たふとけれ、

(明治讀本抄出)

曜
第十六課 七曜

始
今ハ、一月の始めよて、學校ハ、
怠
休みなれども、忠二ハ、怠りなく、
復習
毎日、時をきめて、復習を、な
居れり。

或日、忠二ハ母に向ひ、「母さま。
學校ハ、月曜日から始まるので

火

ありますがいま、いく日あります
か」とひたり。
母ハ、「けふハ、火曜
あすハ、水曜で
それから木曜、
金曜、土曜、日曜
となり、月曜ハ、



金

待

日曜の次でありますから、今日
より、ちやうど、七日目になるよ
と、をーへたり。
忠二ハ、毎日この七曜をかぞへて、
学校の始まる日を待ち居たり。
第十七課 ヲガハタイザン
ユキ、ハゲシクフリ、カゼ、ツヨク

フク ヒ ニ ヒトリノコ
 ドモハカサヲカブリ、フロシキ
 ヅツミヲカ、ヘテ、アユミキタ
 リシガ、ツマヅキテ、ダウトタ
 フレ、ヒザヲキズツケタリ。
 チリシモ、ソコヘキカ、リシヒト
 アリテ、コドモノ、キズノテアテ

ヲナシヤリ、ハヤク、
 ウチヘカヘラレヨ
 ト、ス、メタルニ、
 ツノコドモハ、
 「ゲイコヲヤスム
 ワケニハ、ユキ
 マセヌ」ト、イヒ



アツクレイヲノベテ、タチワカ
レ、センセイノモトヘト、イソギ
タリ。

コノコドモハ、ノチニヲガハタイ
ザントイヘル、ナダカキガクシヤ
トナリタリ。

第十八課 雪ガツセン

生徒

今、多クノ生徒ハ、ウンダウバニ
出デテ雪ガツセンヲ始メント
テ、東ト、西トニ分レタリ。

間

兩方トモ、シバシノ間ハ、雪ダマ
ヲツクリテ、戦ノヨウイヲナ
シ居タリシガ、「イザ、ハジメ」ノ

度

ラツパヲ合圖ニ、一度ニドツト

投

トキノコエヲ
アゲテ、雪ダマ
ヲ投ゲカケタリ。
兩方シダイニ近
ヨリテ、戦フウチ
ニ、タマツキタレ
バ、ハテハ、入り



組

ミダレテ、ムンヅト、組ミ合フモ
アリ、雪ヲスクウテ、敵ノカラダ
ニ、ソ、ギカクルモアリ。

休戦

カ、ルトコロニ、休戦ノラツパ
キコエケレバ、オノノ、本ヂンニ
引キ上ゲタルガ、其ノサマ、ゲニ
イサマシク見エタリ。

第十九課 たのしき家

祖父母

此の家には、祖父母と、父母と、そくて、孝一とお梅と、忠二とあり。

起

此の三人の兄弟ハ、毎朝、早く起きて、かほ哉 あらひたるのち祖父母と、父母とにあいさつをのべ、食事をはれば、相つれ立ちて、

相

學校に行くなり。

學校よりかへれば、

三人一よに、復

習をなし、復習を

志まへば、又一よ

に、あそびに出づ。

もし、又、用を、



用

直付

與

云ひ付けられる、ことあれば、直ぐに、心よく、たうけをするなり。

祖父母と、父母とハ、此の兄弟が、つねに仲よくし、又よく云ひ付けを、守るをよるこび、時々、ほうびを、與ふることあり。

夜分には、家内一同うちよりて、色

話

紀元節

國旗

拜賀式

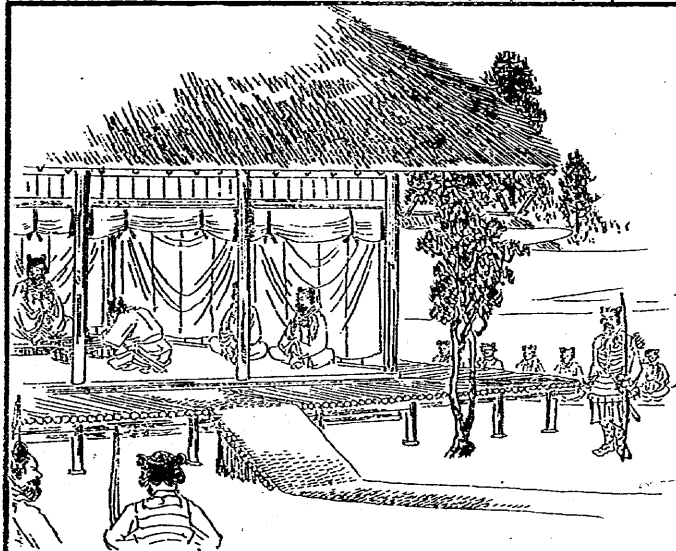
色の、たもろき話をなしてたのしめり。

第二十課 紀元節

二月十一日ハ、紀元節デアリマス
カラ、家ゴトニ國旗ヲ立テ、學校
ニテハ、拜賀ノ式ヲイタシ
マス。

神武

御位



コノ日ハ、今ヨリ、二千五百六十年
 ノ、ムカシ、神武
 天皇ノ、御位ニ、
 オツキナサレタ
 日ニアタルノデ、
 イトモ、メデタイ
 日デアリマス。

世界

神武天皇ト申スハ、我が國第一代ノ
 天子サマデアリマシテ、
 今上天皇陛下ハ、第百二十二代ニア
 タラセラレマス。サウシテ、天子
 サマノ御チスヂハ、イツノマデ
 モ、ツヅカセラル、ノデアリマス。
 カヤウニ、メデタイ國ガラハ、世界ノ

手紙

中ニ、タメシハ、アリマセヌ。

第二十一課 忠二の手紙

忠二ハ、母に向ひ、「母さま 庭の梅
が、よく咲きました、をばさまが
ごらんよ ならば、さぞ ねよるこび
なさいませう、子」と、いへり。

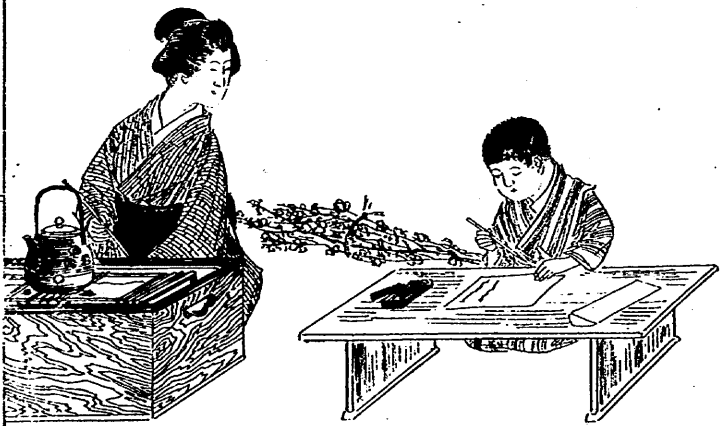
母ハ、「をばさまハ、こられぬから、一枝

机

答

書

折つて、たくり
ませう。誰にか
持たせてやらう
から、お前、手紙を
た書き」と、いへり。
忠二ハ、「ハイ」と答
へて、机に向ひ、



梅の花一枝さー上げます。

二月廿七日

忠二より

をば上さま

とかけり、母ハ、梅の枝に、此の手紙をそへて、使の者に、持せてやりたり。

第二十二課 三郎の鳩

使者

鳩

久

遊

珍

或日、三郎ハ、つねにかはぢがれる、一羽の鳩哉つれ、久ふりよて、忠二の家へ、遊びに行きたり。忠二ハ、いとこの三郎が来りて、よろこび、又鳩哉珍らがりて、豆ふど與へたり。此の鳩は、よく人よふれ居たれば、忠二の

手のひら、かたの上などにのりて、

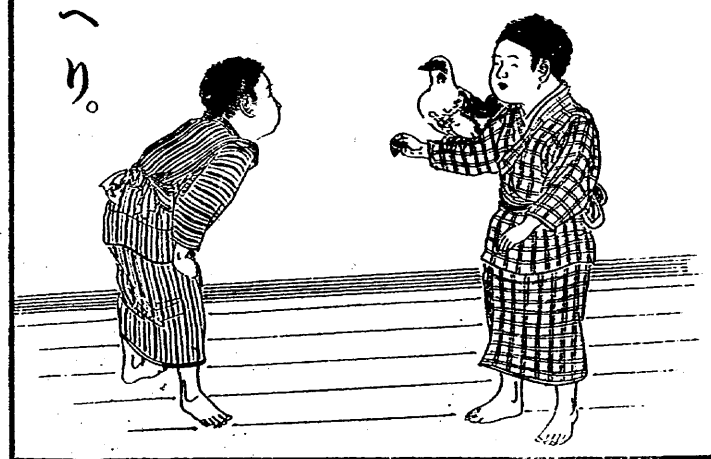
あそびたり。

やがて、三郎ハ、鳩

に向ひ、「お前ハ、

さきにうちへ

歸るのだよ」といへり。



前

歸

忠二ハ、「此の鳩ハはドめて、うち

へ來たばかりで、路がわかり

まを「か」と、問ひければ、三郎ハ、

「鳩ハ、りこうな鳥ゆゑ、よく、路を

たぼえて 居ます」といひたり。

第二十三課 三郎の鳩(三)

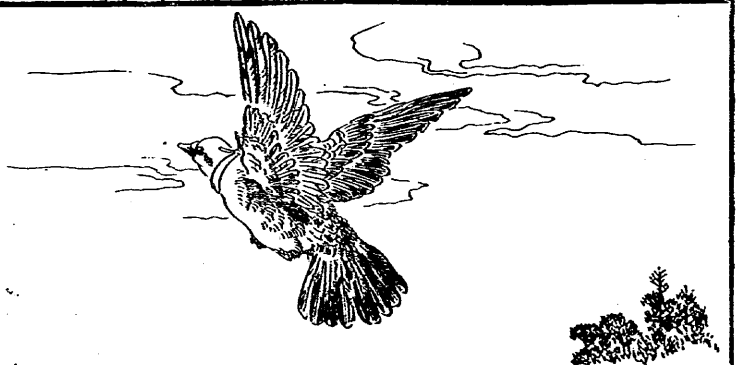
三郎ハ、うすき紙を取り出し、無事よ、

路

取
無事

忠二さまのうちに つきまゝた、
と、またためて、これを小さく
たゝみ、鳩のくびにくゝり付け
て、にはさきにはなちゝに、鳩ハ
空高くまひあがり、自分のすみ
なれたる村を目あてに、矢の
如くにとび行けり。

空



かくて、鳩は、たちまち、
自分の家に著きて、
庭さきにとびわたりたり。
三郎の母ハ、鳩のくび
より、手紙をとりて、
これを讀み、三郎の
無事なることを知りて、

著

讀

安心

安心一たりといふ。

第二十四課、雀ノ話

傍

叶

或、一羽ノ雀ツバサヲイタメテ、
路ノ傍ニ落ち、時々、羽バタキ
スレドモ、タツコト叶ハズシテ、モ
ガキ居タリ。

此ノ時、イツクヨリカ、アマタノ友

連

雀アツマリ來リ、手オヒノ雀
ヲ連レ行カントシタレドモ、思フ
ヤウニナラザリキ。

飛

置

スルト、二羽ノ大雀ハイツレヘカ、
飛ビ行き、一本ノワラヲクハヘ
來リテ、手オヒノ雀ノ前ニ
置キタリ。

ヤガテ、二羽ノ

雀ハ、其ノ

ワラノ、兩ハシ

ヲクハヘ、

手オヒノ、雀

ニ、マンナカヲクハヘサセテ、飛ビ

上レリ、群リ居タル友雀モ、皆



群

サヘヅリツハ、シタガヒ行キテ
手オヒノ雀ヲ、竹ムラノ中ニ、
連レ行キタリ。

第二十五課 竹むら

たかむら出でて、あしたより、
雀も千代^チと、うたふあり。
空とぶとりも、おのづから、

たのーき 聲に、うたふ なり。
 うたへば とりも、うたふ なり、
 遊へば 鳥も、あそぶ なり。
 たのーき 歌を、うたふ まに、
 子供も いつか、人 と ちる。

(明治唱歌集抄出)

K 120.8-258-1

新撰 尋常小學讀本卷四 終

尋常小學讀本附

K120.8

明治三十二年十月二十五日 印刷
 同 年十月二十八日 發行

定價金拾錢

發行兼 印刷者

東京市日本橋區本石町十軒店六蔵地
 阪上 半七



